

〈腰折れ文〉八、

渡邊澄子（会員）

どうしてこう次から次へと我慢のならぬことが起こるのだろうか。名護市長選挙結果には度肝を抜かされた。祝杯を挙げるつもりでいた深夜、結果に呆然。涙がこぼれた。何故？ 何故？ 与党推薦候補は辺野古問題には触れず、地域経済の活性化を前面に掲げ、自民・公明の大名のを応援に差し向け、稲嶺氏当選でカットした政府交付金をたっぷり出すと宣伝しまくったらしい。戦時中は本土の人柱にされたのに戦後に至ってなお事情は変わっていない。米軍機からの落物物、不時着のみならず人権蹂躪事件など危険が日常化している。米軍の軍属扱いに日本政府は毅然と対峙できない。「米軍の増長は政府の責任」(2・15、『琉球新報』)の一語に尽きる。それにして、名護市民がお金に釣

られたとは思いたくない。負けても辺野古基地賛成が民意ではないと分析されているが、でも、負けは負け。自民党の権力・金力による狡猾な策略にたぶらかされてしまったのだろうか。哀しい。「力による平和」論者のトランプ大統領が「脱オバマ」から小型で使いやすい新型核兵器開発(NPR)を打ち出した。小型だろうが核の恐怖を体験している日本は強固な同盟国のもりなら諫めるべきなのに「核の傘」論から肯定している。悲惨な戦争に突進した右派を引き継ぐ政治家の多い自民党の中で常識・正論派として歯止め役の希望を托していた河野太郎が外相になったら途端に変わった。権力のおいしさを知ると人間は変わるのだろうか。情けない。ノーベル賞の季節だった。平

和賞は国際NGO「核兵器廃絶国際キャンペーン」(ICAN)が選ばれたのは世界の叡知の健全さを示していて、被曝者・反核論者の歓声に私も唱和した。米国の「核の傘」への依存から核禁止条約の交渉会議に不参加の日本政府への怒りは収まらない。核大国のトランプ大統領は安全保障とビジネスを絡めて守ってやるから金を出せ、武器を買えと迫り、安倍首相ははいはいと応じている。その金は、安倍さん、あなたのお金じゃないのよ。ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロさんは長崎生まれで五歳まで長崎で育ち、その後日本人の両親と共に渡英した日本人だが英国人なのだ。何国人ではなく個人であることが示された。在日韓国人の二世・三世が帰化した例は多いが、日本人になっても差別に曝されている、作品には被差別者の苦悶が色濃い。英国に人種差別は無いのだろうか。全く未知の作家だったので彼の作品『日の名残り』を読んでみた。日本では馴染み

のない執事の私語りで、まさに英国だった。受賞式後の晩餐会で子どもの頃、ノーベル賞は「ヘイワを広めるためにつくられた」と母から聞いたと日本語を交えて挨拶したという。語り手は優秀な執事だ。和平問題にも言及されていて、奥の深い小説として読んだ。あと一点だけ。振り袖販売・レンタル業の「はれのひ」が突然営業停止して騒動になった事件。成人式に晴れ着を賞め合う楽しみを奪われた女性たちの怒り、嘆きを想像して、商道徳皆無の業者に怒り心頭だが、毎年の成人式日にかける個性埋没の誰もが同じ着物姿にはうんざりだ。レンタル料は四泊五日が普通で最安値が一式一万五千円位、着物他の高品化に比例して十万円以上になるとか。前金払いで着物を買う人もいる。ここでも貧富の格差がものを言うが、買ったら箆のこやしにならないかしら。あんな慣習は止めて服装は自由にすればと思ってしまう。もっと大事な問題は次回に。